

アフリカと「アフリカの独立」に関する報道と理解(4)

川 端 正 久

2-1 論文と著書

論文

「英領アフリカ」『海外市場月報』6巻51号、1956年1月、22-24頁。「北アフリカ 仏領モロッコ」(大宅壮一)；「南アフリカ シエンバのダンス」；「トリポリ (リビア)」『国際文化画報』1956年1月、7月、11月 (頁なし)。
陸井三郎「風雲を呼ぶ中近東」；西野照太郎「たちあがるアフリカ」；グラビア「モロッコの血と砂」『知性』3巻1号、1956年1月、101-104、104-110、91-94頁。倉田順平「中近東・アフリカの旅」『日本ゴム協会誌』29巻1号、1956年1月、34-35頁。橋本謙一「エジプトの窯業」『窯業協会誌』64巻718号、1956年1月、C6-C12頁。藤井正夫「英領西アフリカ、ナイゼリア経済と英国資本 (I・II)」『国際食糧農業』5巻1号、1956年1月、38-44頁；5巻2号、1956年2月、52-57頁。岩田慶治「戦後刊行の外国雑誌 アフリカ」；斎藤叶吉(紹介) P.スコット「複合人種都市ケープタウン」『人文地理』7巻6号、1956年2月、66-68、55-56頁。大森貝介「密林の妖術部落「イホー」」『オール讀物』11巻2号、1956年2月、224-232頁。ジョン・ガンサー「アフリカの内幕 モロッコ篇」『日本評論』27巻2号、1956年2月、88-104頁。田中三男「新しいエジプト」『世界週報』37巻6号、1956年2月、38-39頁。「ナイジェリア」『海外市場月報』6巻52号、1956年2月、16-17頁。西野照太郎「勝利の神に仕える男 アブド・エル・ナセル」『知性』3巻2号、1956年2月、256-261頁。楊学純「中近東・北アフリカの情勢」；王克

勤「北アフリカにおけるフランスの植民地支配の危機」『前衛』2号、1956年2月、85-90、90-96頁。「アルジェリア問題他」外務省国際協力室第一課『国際連合第十総会の事業』外務省国際連合局、1956年3月、119-122頁他。

入江猪太郎（紹介）P.T.パウアー「西アフリカの貿易」『アジア問題』4巻3号、1956年3月、127-133頁。岡本昌雄「久しぶりの日本向け輸出」『海外市場月報』6巻53号、1956年3月、37-38頁。海妻玄彦「モロッコ問題」『東京外国語大学論集』5号、1956年3月、97-109頁；「同（Ⅱ）」6号、1957年3月、71-78頁。熊沢三徳・井上信一「北アフリカ問題の経済的背景」；柳沢英二郎「ゴールド・コースト政治史メモ」『インド・イラン評論』3号、1956年3月、17-24、4-16頁。小谷忠道「カイロ日本商品見本市現地通信」『大阪貿易館報』1956年3月、27頁。「SIMBA＝暗黒大陸」『英語研究』45巻3号、1956年3月、50-55頁。鈴木誠「北アフリカ発見の*Atlanthropus*」『Swanscombe頭蓋の右頭頂骨』『人類学雑誌』64巻4号、1956年3月、78-80、80-81頁。「チュニジア問題について国連あての声明」；「モロッコ事件にたいする抗議」『世界労連決議決定集 下巻』五月書房、1956年3月、62-63、63-64頁。村武精一「西アフリカにおける社会変動研究上の諸問題——一つの素描——」『愛知大学文学论叢』12輯、1956年3月、61-95頁。「アフリカの文明国 ナイジェリア」『サングラフ』6巻4号、1956年4月、23-26頁。岩永博「ナイル河の灌漑問題」『歴史教育』4巻4号、1956年4月、9-14、61頁。「エジプトの外国貿易概況（五五年）」『海外貿易情報』241号、1956年4月、12-14頁。「エジプトの綿花金融」『東京銀行月報』8巻4号、1956年4月、38-40、76頁。最所隆博「南ア連邦、エチオピア及びアデンの素描——繊維品市場としてのあらましと問題点」『輸出綿糸布月報』6巻4号、1956年4月、10-13頁。「斗う南アフリカの自由な労働組合」『月刊自由労連』1巻2号、1956年4月、26-28頁。西野照太郎「アフリカの人種闘争」『日本及日本人』7巻4号、1956年4月、31-33頁。檜垣正忠「スーダンの国連加盟と日本」『世界とわれら』35巻4号、1956年4月、36-41頁。「ベル

ギー領コンゴの繊維工業」『海外貿易情報』240号、1956年4月、15-16頁。
 「アフリカ 概観」他『海外市場』6巻55号、1956年5月、30-31頁他。「ア
 フリカ諸国」『通商白書 日本貿易の現状 昭和31年』通商産業省、1956
 年5月、288-295頁。飯田実「ケニア紀行」『水産時報』8巻85号、1956年5
 月、20-26頁。S「アルジェリアの死斗」『世界週報』37巻15号、1956年5月、
 59-63頁。「ゴールドコーストのココア農場における労働と賃金」『月刊自
 由労連』1巻3号、1956年5月、22-23頁。斎藤叶吉（紹介）モーガン「ニジ
 エリア南東部における農作業、居住型および人口密度」『地理学評論』29
 巻5号、1956年5月、309-310頁。アブドラヤ・ディアロ「アフリカ労働組
 合の反植民地闘争を發展させるために」他『世界労働組合運動』165号、
 1956年5月、28-31頁他。西野照太郎「評傳 ナセル」『中央公論』71年5号、
 1956年5月、136-157頁。原利男「北アフリカ市場における日本茶と中国茶
 の品質」『農産加工技術研究會誌』3巻2号、1956年5月、40-43頁。湯浅克
 衛「白人には天国だが…」『地上』10巻5号、1956年5月、46-51頁。「アフ
 リカ 概観」他『海外市場』6巻56号、1956年6月、28-29頁他。「アルジェ
 リアと「汚い戦争」」『世界』126号、1956年6月、12-16頁。コピナ・ウル
 ズ「ゴールド・コーストの闘争（1）」他『世界労働組合運動』166号、
 1956年6月、34-37頁他。倉田俊「中近東紀行——エジプトのカイロ——」
 『信濃教育』834号、1956年6月、64-75頁。「自由な労働組合運動とアフリ
 カ大陸」『月刊自由労連』1巻4号、1956年6月、14-15頁。ジョセフ・
 デー・ハビブ「対エジプト貿易の情勢と改善」『海外貿易情報』72号、
 1956年6月、15-16頁。三浦初男「英領東ア・西アの見通し」『輸出綿糸布
 月報』6巻6号、1956年6月、15-17頁。向井啓雄「モロッコの王者 ベン・
 ユーセフ首長の横顔」『知性』3巻7号、1956年6月、236-241頁。「アフリカ
 概観」他『海外市場』6巻57号、1956年7月、29-30頁他。ジョン・ガン
 サー「アフリカ大陸の新興国 スーダン」『リーダーズ・ダイジェスト』
 11巻8号、1956年7月、143-146頁。近藤等「ケニア遁走曲」『オール讀物』

11巻7号、1956年7月、140-147頁。杉田喜三郎「スターリング地域 南阿連邦篇」『外国為替』145号、1956年7月、25-28頁。「スターリング地域諸国 第七章 英領アフリカ」『通商調査月報』59号、1956年7月、58-62頁。「前途洋々たるベルギー領コンゴの経済」『海外貿易情報』249号、1956年7月、17-31頁。「ゾウ狩りのうまい小人 アフリカの魔境に住むピグミー族」『サングラフ』6巻7号、1956年7月、13-15頁。富村傳「埃及王朝時代の軍事組織」『古代學』5巻2号、1956年7月、160-174頁。「ナイジェリアの意匠と風俗」『海外市場』6巻57号、1956年7月、61-63頁。中岡三益「エジプト社会の変革」坂本是忠他編『現代アジア史 第三巻 アジアの展望』大月書店、1956年7月、284-294頁。南平正治「アフリカ繊維市場めぐり」『帝人タイムス』26巻7号、1956年7月、32-38頁。平野昭司・飯田実「マグロの新漁場をゆく——アフリカ東岸調査行報告——」『水産界』859号、1956年7月、22-25頁。「フランス領カメルン経済の概況」『国際食糧農業』5巻7号、1956年7月、8-11頁。松本治一郎「北アフリカ紀行」『政界往来』22巻7号、1956年7月、45-47頁。山澄元「東部及び中央アフリカの鉄道建設」『人文地理』8巻3号、1956年7月、43-45頁。「アフリカ 概観」他『海外市場』6巻58号、1956年8月、30頁他。エリ・ヴァトリナ「自主的な発展の道に立つエジプト共和国」；エチエンヌ・ファジョン「アルジェリア休戦をめざすたたかいと統一戦線」『世界政治資料』3号、1956年8月、1-7、8-13頁。「エジプトの経済」『調査月報』（大蔵省）45巻8号、1956年8月、110-133頁。C.カーフ「エジプトの経済」『世界情勢旬報』296号、1956年8月、20-29頁。「立上るアフリカ労組運動」『月刊自由労連』1巻6号、1956年8月、14-15頁。中岡三益「ナセル政権の経済的背景」『エコノミスト』34巻33号、1956年8月、42-45頁。西野照太郎「失われつつある南ア連邦の農業」『農業朝日』11巻8号、1956年8月、46-47頁。原子林二郎「エジプトの民族主義・経済・外交政策」；杉谷好一「スエズ運河の話」『世界週報』37巻24号、1956年8月、24-28、36-37頁。「仏領アフリカにおける新し

い労組統一のうごき」他『世界労働組合運動』168号、1956年8月、28-31頁他。本郷新「誠実と努力が宿る彫刻 カイロの思い出」『週刊読売』15巻36号、1956年8月、36-37頁。「エジプト アスワン投資困難か」他『海外市場』6巻59号、1956年9月、25-26頁他。岡倉古志郎「独立への狼火——中東、アフリカの民族主義——」『世界の社会主義』（社会主義講座第6巻）河出書房、1956年9月、232-249頁。岡田富美也「世界カメラの旅（第六回） アフリカ」『中学初級コース』1巻6号、1956年9月、35-50頁。河合諄太郎「ある黒人共和国——世界に唯一つの黒人独立国見聞記——」『文藝春秋』34巻9号、1956年9月、212-221頁。ベルハッセン・キアアリ「チュニジア 労働戦線の統一は近い」他『世界労働組合運動』170号、1956年9月、14-17頁他。ジョージ・ケント「スリル満点コンゴ生活二十年」『リーダーズ・ダイジェスト』11巻10号、1956年9月、126-132頁。島本末晴「繊維市場よりみたアフリカの現状と将来」『輸出綿糸布月報』6巻9号、1956年9・10月、17-20頁。「対スターリング地域貿易の考察」『東京銀行月報』8巻9号、1956年9月、25-59頁。西野照太郎「ナセルの立場」『中央公論』71年10号、1956年9月、42-47頁。武者小路公共「スエズは誰のものか」『實業之日本』59巻21号、1956年9月、24-27頁。柳沢英二郎「ゴールド・コースト政治史（一・二）」『法政論集』4巻2号、1956年9月、108-144頁；4巻3号、1956年12月、67-100頁。吉田建「特集 アフリカの経済・貿易・投資」『エコノミスト』34巻35号、1956年9月、28-36頁。ジョン・ガンサー「暗雲に覆われた南アフリカ」『リーダーズ・ダイジェスト』11巻11号、1956年10月、54-62頁。神戸辰雄「ナイジェリアの経済現況」『レファレンス』69号、1956年10月、110-113頁。「世界の謎 アフリカ大陸 アフリカ民族の覚醒」「水の中で閣議 エチオピアの首都」須磨弥吉郎『外交秘録』商工財務研究会、1956年10月、83-91頁。高橋潤二郎（紹介）G・M・カーター「南ア連邦に於けるアパルトハイト政策は可能か」『世界経済』11巻2号、1956年10月、60-66頁。ガマル・アブダル・

ナセル「エジプトの獨立とスエズ運河國有化について」；西野照太郎「ナセルの顔」；奥野保男「エジプト革命の歩みから」；A.ロス「揺ぐ帝國」；「黒人共和國の誕生近し」；M.フェルトン「アフリカの女・生きているうちに」『世界』130号、1956年10月、108-125、126-127、128-134、146-158、198-202、239-247頁。西野照太郎「二人のアフリカ青年の話」『中央公論』71年11号、1956年10月、236-243頁。林昂「イスラームの法燈」『世界週報』37巻29号、1956年10月、62-63頁。マヨア・ベック「前進するアフリカ労働者の統一」『世界労働組合運動』171号、1956年10月、44-46頁。「アフリカ」『海外市場』6巻61号、1956年11月、30-39頁。「アフリカ大陸に拾う（一・二・三・四・五）」向井啓雄『とつくにびと 風變りな旅行者』文藝春秋新社、1956年11月、121-201頁。安野光雅「象牙海岸への道」『美術教育』35号、1956年11月、18-19頁。板垣雄三「ナセル政権の性格について」；伏見楚代子「アフリカ経済（サハラ砂漠以南）の基本問題」；坂下靖子・川上勝己「エジプト憲法——解説と全訳」『インド・イラン評論』5号、1956年11月、1-7、12-19、31-45頁。岩田慶治「熱帯アフリカにおける交易形態」；西野照太郎「熱帯アフリカのナショナリズム」多田文男・石田龍次郎編『熱帯・寒帯・内陸の地理』（現代地理学講座6）河出書房、1956年11月、170-183、186-198頁。H「解決せまられる北ア情勢」『エコノミスト』34巻46号、1956年11月、48-49頁。「エジプトとの連帯をよびかける世界労連」他『世界労働組合運動』172号、1956年11月、21頁他。ジョン・ガンサー「被征服國エジプトの内幕」；西野照太郎「アラブ連盟の首領たち」；嬉野満洲雄「アルジェリアの叛乱軍」『文藝春秋』34巻13号、1956年11月、56-78、79-83、130-134頁。「経済的獨立への前進チュニア労組大会」『月刊自由労連』1巻9号、1956年11月、32頁。「南西アフリカ問題」；「タンガニカ地域信託統治協定」；「ソマリーランド信託統治協定」外務省国際協力局国連諸機関室『国際連合信託統治理事会』外務省国際協力局、1956年11月、186-198、279-286、313-330頁。林寿郎「戦

（龍法 '19）52-2、98（496）

慄のアフリカ猛獣狩り」『特集人物往来』1巻7号、1956年11月、158-163頁。
 アンリ・バルベ「アルジェリアの土地問題」；レイモン・バルベ「フランスとアルジェリア市場」『世界政治経済資料』100号、1956年11月、3-58、59-78頁。本郷寿蔵「喜望峰廻り第一號」『文藝春秋』34巻11号、1956年11月、294-299頁。矢内原勝（紹介）ニューリン・ロウワン「英領アフリカ植民地における貨幣と銀行業務」『経済評論』5巻11号、1956年11月、91-99頁。山野井乙彦「世界の国情（第23集）モロッコとチュニジア」『社会人』91号、1956年11月、47-51頁。青野博昭「黄金海岸の黒人首相」；西野照太郎「スエズ運河」『新しい出発』（世界歴史物語8）河出書房、1956年12月、152-171、188-206頁。青野博昭「夜明けのアフリカ——二人の偉大な民族指導者の半生——」『人生手帖』5巻12号、1956年12月、74-77頁。「アフリカ諸国」国際連合統計部編『国際連合貿易統計年鑑1956』東京教育研究所、1956年12月、頁略。「アフリカの明暗」～「カイロの微風」加藤シヅエ『ひとすじの道』ダヴィッド社、1956年12月、118-141頁。「エジプト」他『海外市場』6巻62号、1956年12月、32-33頁他。「エジプト共和国憲法」『法曹時報』8巻12号、1956年12月、43-57頁。榎原猛「エチオピアの憲法」；「エチオピア憲法」大石義雄編『世界各国の憲法典』有信堂、1956年12月、119-122、122-127頁。岡田信次「革命児ナセル（その一・二・三）」『経済時代』21巻12号、1956年12月、78-79頁；22巻2号、1957年2月、72-73頁；22巻3号、1957年3月、80-82頁。今野良蔵「旅路の藤山さんの表情（コンゴ通信）」『財界』4巻22号、1956年12月、58頁。今野良蔵「中近東・アフリカの旅から帰つて」『国民経済』10号、1956年12月、1-16頁。今野良蔵「伸びゆく黄金海岸」『世界週報』37巻36号、1956年12月、40-41頁。「西部アフリカの先驅的労働組合運動」『月刊自由労連』1巻10号、1956年12月、28-29頁。高橋統一「東アフリカの年令集団組織——社会構造と民族文化の問題——」『民族学研究』20巻3・4号、1956年12月、114-119頁。西野照太郎「アフリカ国民所得に関するノー

ト』『後進国の国民所得』（エカフェ資料4号）日本エカフェ協会、1956年12月、66-92頁。西野照太郎「アフリカのナショナリズム——政党の現状を中心に——」；同「植民地ナショナリズム」の理論——カリスマ的指導者論の批判を中心に——」世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』慶應通信、1956年12月、401-440、639-662頁。西野照太郎（書評）ガンサー「アフリカの内幕」『週刊東京』2巻47号、1956年12月、80-81頁。秦正流「ナイル河の農業」『農業朝日』11巻12号、1956年12月、48-49頁。武者小路公共「ハイレ・セラシエ皇帝の思い出」『實業之日本』59巻27号、1956年12月、83-85頁。

著書

外務省欧米局第七課『リベリア事情報告』外務省欧米局、1956年1月。
 明石染人『埃及コプト染織工藝史』京都書院、1956年2月。「スーダンの自治及び自決に関する…連合王国とエジプト政府との間の協定（英文）」『条約集 第34集10巻』外務省条約局、1956年3月。経済団体連合会『ナイジェリアの経済とその開発』（経団連パンフレット32号）経済団体連合会、1956年5月。蠟山芳郎編『岩波小辞典 国際問題』岩波書店、1956年5月。
 海外貿易振興會『西アフリカ市場調査団報告書』海外貿易振興會、1956年6月。海外貿易振興會『輸出市場としてのナイジェリア』海外貿易振興會、1956年6月。松本治一郎『西欧・北アフリカ・中近東をめぐりて——民族解放のいぶき——』解放新聞社、1956年6月。須磨弥吉郎『スエズの問題』商工財務研究会、1956年8月。ヘミングウェイ（西村孝次譯）『アフリカの緑の丘』（ヘミングウェイ全集 第五巻）三笠書房、1956年8月。外務省経済局第六課『エジプトとの貿易関係』『エチオピアとの貿易関係』『スーダンとの貿易関係』『チュニアとの貿易関係』『モロッコとの貿易関係』『ライベリアとの貿易関係』『リビアとの貿易関係』外務省経済局、1956年9月。G・A・ナセル（西野照太郎譯・編）『革命の哲學』平凡社、1956年9月。平凡社『世界文化地理大系 23 アフリカ』平凡社、1956年9月（龍法 '19）52-2, 100（498）

月。外務省欧米局中近東書記官室（ガマル・アヴドウン・ナーセル著、林昂訳）『革命の哲理』（欧七資料14号）外務省欧米局、1956年10月。毎日新聞社人口問題調査會『エジプトの人口問題』資料第五十六号、1956年10月。外務省欧米局中近東書記官室『アスワン・ハイ・ダムの意義』（欧七資料15号）外務省欧米局、1956年11月。ジョン・ガンサー（土屋哲訳）『アフリカの内幕 I・II』みすず書房、1956年11月；1957年5月。

2-2 文献と概説

外務省は1956年9-11月に藤山愛一郎（日商会頭）を「外務省経済査察使」として中近東・アフリカ諸国に派遣した。査察団はエジプト、エチオピア、英領ケニア、南阿連邦、ベルギー領コンゴ、英領ナイゼリア、英領ゴールド・コーストを廻った（藤山愛一郎『私の自叙伝』学風書院、1957年8月、204頁）。藤山愛一郎自身の撮影した写真が『世界週報』（1957年1月1日）に掲載された。同行した今野良蔵（国民経済研究協会常務理事）は報告「中近東・アフリカの旅から帰つて」の中で中近東・アフリカが日本外交において軽視されていることを問題にした。「外交についていえば、欧米重点主義を転換する必要があるだろう。外交官なども現在は中近東、アフリカなどには二流、三流のものを配置しているが、これは即刻にも改めるべきである」（14頁）。外務省にとってスエズ運河問題への対応は微妙であった。杉谷好一（外務省中近東書記官室）は「スエズ運河の話」で複雑な心境を吐露した。「国際水路の安全保持という英仏の言分も尤もだが、1888年の運河条約の規定する自由航行の原則を守り、公正な補償を与えて運河会社の国有化を行うことが何故悪い、とするエジプトの国民感情が理解できるような気がするのである」（37頁）。なお外務省経済局第六課は1956年9月にアフリカ諸国（エジプト、エチオピア、スーダン、チュニジア、モロッコ、ライベリア、リビア）との貿易関係についての小冊子を作成した。

外務省地域部局の変遷は煩雑であった。1955年7月、中近東アフリカ地域を所掌する欧米局第七課が設置された。1956年4月、第七課は廃止され、中近東書記官室に引き継がれた。1957年4月、欧米局が再編され、欧亜局第四課が中近東アフリカ地域所掌課として設置された。

海外貿易振興会（大阪）は「西アフリカ市場調査団」を1956年1-4月に派遣した。団長は内海俊一（西沢）、団員は鈴木弘（三菱商事）、島本末晴（日綿実業）、中島進一（第一物産）、三浦初男（丸紅飯田）、書記は井上昌（江商）であった。現地調査はカイロ、アジス・アベバ、ナイロビ、モンバサ、ダレスサラム、ウスンブラ、スタンレイヴィル、エリザベスヴィル、レオポルドヴィル、アクラ、ラゴス、カノーで実施された。『西アフリカ市場調査団報告書』（1956年6月）はエチオピア、英領東アフリカ、ベルギー領コンゴ、ナイジェリア、ゴールド・コーストの市場調査の結果を詳細に記録している。また『輸出市場としてのナイジェリア』が刊行された。

多様な日本人がアフリカ諸国を訪問した。飯田実は大富士丸でモンバサ港に入港し、1955年12月から1956年1月まで漁場調査を実施した。加藤シヅエ（参議院議員、日本社会党）は1955年8月にMRA（道徳再武装）の国際親善使節団に参加し、カイロとナイロビを訪問した。河合諄太郎（都立商科短大教授）はユネスコの「未開発国技術指導要員」として1955年7月から一年間リベリア大学で自然科学を教授した。その見聞記「ある黒人共和国」は次のように初印象を回顧している。「7月26日、リベリアのロバーツフィールド飛行場に降り立った私は、空港を一見して驚いた。野蠻國の面影はどこを探しても見當たらぬ」（212頁）。倉田順平（日華ゴム）は1955年4-6月にアディスアベバ、スタンレーヴィル、レオポルドヴィル、アクラ、ラゴスを訪問した。松本治一郎（参議院議員、左派社会党）は1956年3月にパリで開催された「人種差別反対・ユダヤ人排斥反対国際同盟大会」に参加した後、4月に北アフリカ3カ国（チュニジア、アルジェリア、モロッコ）を訪問した。

研究者の論文としては次のものがある。岩田慶治（大阪市立大学文学部助教授）「熱帯アフリカにおける交易形態」は交易都市ティンブクトーを分析した地理学研究である。高橋統一（日本民族学協会会員）「東アフリカの年令集団組織」は年齢集団（age group）組織の類型を分析した人類学研究である。西野照太郎（国立国会図書館調査員）「アフリカ国民所得に関するノート」は多人種社会（multi-racial society）の経済構造（国民所得）を検討した。西野照太郎「アフリカのナショナリズム」は植民地における議会、植民地ナショナリズムと政党、独立諸国の政党とナショナリズムを分析した。西野照太郎「植民地ナショナリズム」の理論は「カリスマ的指導者」論を批判した。西野照太郎「熱帯アフリカのナショナリズム」は植民帝国の植民政策とナショナリズムの現象形態を分析した。西野照太郎の一連の論考はアフリカ・ナショナリズム論の先鋒を切り拓いた。村武精一（愛知大学総合郷土研究所研究員）「西アフリカにおける社会変動研究上の諸問題」はアフリカ人類学研究の端緒である。「ゴールド・コースト政治史メモ」を発展させた柳沢英二郎（名古屋大学法学部助手）「ゴールド・コースト政治史」はアフリカ政治史研究論文の嚆矢である。1955年末までの政治史を詳細に記述している。基本文献（たとえばF.M. Bourret, *The Gold Coast*, 1952）の利用など研究の手法は堅実である。

アフリカの民族解放運動の動向が紹介された。外務省の担当者もアフリカ独立の動きに注目した。岡田富美也（外務省欧米局中近東書記官室）「アフリカ」は次のように説明した。「ナイジェリア、ケニア、ウガンダ、ゴールドコースト等の各地域の住民も独立を強く希望しており、おいおいそれが実現の方向へ向かうものとみられています。…暗黒大陸が明かるい大陸にすっかり生まれ変わったら、どんなにすばらしいことでしょう」（48-50頁）。岡倉古志郎「独立への狼火」は民族解放運動がアフリカ全体で前進していると指摘した。

西野照太郎は政治家ナセルを分析した。西野照太郎「評傳 ナセル」は

次のように結んだ。「アブド・エル・ナセルという彼の名は、アラブ語で「勝利の神に仕える男」を意味するが、彼はイデオロギーによつて左右されることなく、現実的な計画と実行力によつて勝利を得る男である」(157頁)。ナセル(西野照太郎譯)『革命の哲学』が刊行された。これは『革命の哲学』(Gamal Abd El-Nasser, *The Philosophy of the Revolution*, 1955)の翻訳である。西野照太郎は「革命の哲学」とともに、「エジプトの革命」と「スエズ運河国有化宣言」を紹介し、さらに解説「ナショナリズムと革命の理論」を添付した。新聞広告は「スエズ運河を股にかけた革命児ナセルの波瀾万丈の半世紀!」(朝、10月5日)である。西野照太郎の解説はナセルをカリスマ的指導者とする安易な論調に対して次のように警鐘を鳴らした。「後進国のナショナリズム指導者に対して、この「カリスマ的指導者」の考え方を適用することは、現実の指導者が示している性格や役割を説明する上に、現実的には非常に便利であるために、一応は正しいものであるかのようにみえる。しかし、本質的なナショナリズム指導者の性格を知るには、もっとも危険な考え方であるといえる」(223頁)。なお「革命の哲学」の翻訳については林昂(『革命の哲理』外務省)の協力を受けたことを付記している。

1956年7月、二人のアフリカ人青年(ケニヤとウガンダ)がセミナーに出席するために訪日した。西野照太郎は二人の青年と出会った。「僕は今までアフリカの研究をしながら、アメリカのアフリカ人ではない本當のアフリカ人に會ったのは、これが初めてである」(「二人のアフリカ青年の話」238頁)。「本當のアフリカ人」という表現が面白い。アフリカ研究者にとって、「本當のアフリカ人」との出会い重要である。青野博昭「夜明けのアフリカ」は「今年の七月、日本にやってきた二人のアフリカ青年をかこんで日本の若い社会党員W君と、国際政治評論家のN氏が会合をもった」(77頁)と言及した。会合は中央公論社が設定した。二人のアフリカ青年はケニヤのジュグナ(Njuguna)とウガンダのルボワ(Lubowa)

であった。西野照太郎は二人から両国における民族運動の詳細を聞き出した。また二人はアジア・アフリカ研究会で報告していた（『インド・イラン評論』5号、1956年11月、54頁）。

人種問題に光が当てられた。西野照太郎「アフリカの人種闘争」はアフリカ映画についての批評である。イギリス映画「暗黒大陸」（原題シンバ）とフランス映画「悪の決算」を取り上げた。暗黒大陸はマウマウ反乱におけるイギリス人を擁護した。「イギリス人を憎み、惨殺するアフリカ人はドギツイまでに描かれるが、アフリカ人を憎み、殺害するイギリス人はほとんど描かれていない。…イギリスに引揚げようとしない植民者が、アフリカを愛する崇高なヒューマニストとして描かれる」（31頁）。湯浅克衛「白人には天国だが…」は「二千万人の黒人が二百万人の白人におさえつけられている」実情を活写し、「いずれは、そういう植民地のなくなる日が来るであろう」と結んでいる（46、51頁）。明晰である。

アフリカについての総合的理解の著作としては『世界文化地理大系 23 アフリカ』が最大の成果であった。能登志雄「アフリカの自然」、林寿郎「アフリカの動物」、村武精一「アフリカの住民と生活」、前嶋信次「アフリカ探検史」、西野照太郎「アフリカの植民史」、同「アフリカの政治と民族運動」、同「アフリカの経済と開発」、「エジプト」、「北アフリカ」、「西アフリカ」、「砂漠地帯」、「中央アフリカ」、「南アフリカ」、「東アフリカ」、「マダガスカル」、「周辺の島々」等である。アフリカ政治経済を執筆した西野照太郎は民族運動の特質について次のように記述している。「植民地主義に反対するすべてのアフリカ人が、解放のための協力を強めるのである。一種の連鎖反応ともいえる敏感な反植民地運動は、ひとつの植民地のアフリカ人のストライキや反乱さえも、全アフリカの民族主義者の支持と協力を生む。いわゆる＜パン・アフリカ運動＞は、…今では、アフリカ内部の現実の運動となっている」（111頁）。

ジョン・ガンサー（土屋哲訳）『アフリカの内幕』がみすず書房「現代

史大系」の第10-11巻として刊行された。新聞広告は「震えざわめく植民地革命の嵐 謎の大陸30年踏査の問題の書」(朝、11月13日)である。訳者あとがきは「『アフリカ百科』の観を呈している。…『アフリカ人のアフリカ』の誕生を繰返し主張していることも注目してよいだろう。新しい歴史の第一歩を踏み出したアフリカを知る上になくってはならぬ労作と確信する」(336頁)と評価した。ただし、ガンサーの視点は「日本版への序」にあるように白人優越論である。「アフリカは、たとえ自由になったとしても、なお保護が必要である。植民地主義の濫用は間違いであるが、だからといって民族主義は常に正しいということにはならない。白人と黒人がアフリカで、ともに平和に生きることを学び得て、かつ白人の練達さが全く拒否されることのないよう望もうではないか」(3頁)。ガンサーは白人優越の姿勢を堅持したのである。西野照太郎はガンサー『アフリカの内幕』についての書評においてガンサーの姿勢を痛烈に批判した。「ガンサーは結局アフリカ問題の本質にふれていない。…植民地革命の本質はこの本からは少しも理解できない。…これは絵のないアルバムにすぎない。読んでもの識りになっても、植民地革命を理解する力は得られない」(81頁)。町野武(朝日新聞社外報部)も書評においてガンサーの「白人の任務」論を批判した(44頁)。

蠟山芳郎編『岩波小辞典 国際問題』が刊行された。同書で取り上げられたアフリカ問題事項(広義)は次のとおりである。アジア・アフリカ会議、アジア・アフリカの思想、アジア・アフリカ・ブロック、アパーサイド(アパルトヘイト)、アフリカの分割、アルジェリア問題、英・エジプト条約、エチオピア戦争、黒人問題、植民地ナショナリズム、信託統治、スーダン問題、タンジール事件、チュニア問題、ボーア戦争、モウモウ(マウマウ)団、モロッコ問題。本書はアフリカに関する事項が国際問題として取り上げられつつあったことを証明している。

(なおスエズ運河国有化宣言以降、スエズ運河問題についての記事・論
(龍法 '19) 52-2, 106 (504)

文が大量に出されたが、あまりにも多量なので、本稿ではスエズ運河問題の関連論文の紹介を割愛している）。

13 1957年

1-1 記事と動向

アフリカと日本

1月1日 ナセル大統領の新年のメッセージ〔毎日新聞記者（佐藤巧二）に託したもの〕（毎）。1月15日 松平康東日本代表は国連総会政治委員会で南ア連邦の人種問題について同国政府と協議するための委員会を設置するよう提案した（毎）。1月18日 「アフリカー周 第一信 アンゴラ」（朝）；続「第二信 コンゴ」1月25日、「第三信 仏領赤道アフリカ」2月1日、「第四信 北ナイジェリア」2月8日、「第五信 南ナイジェリア」2月15日、「第六信 ゴールド・コースト」2月22日、「第七信 仏領西アフリカ」3月1日、「第八信 モロッコ」3月8日、「第九信 タンジール」3月15日、「第十信 ウガンダ」3月22日、「第十一信 ケニア」3月29日、「第十二信 中央アフリカ連邦」4月5日、「第十三信 エチオピア」4月12日、「第十四信 スーダン」4月19日、「第十五信 アフリカー周を終わって」5月3日。1月27日 日本船有馬丸がエジプト綿を積んで日本に向かった（朝）。1月29日 辻政信代議士はナセル大統領と会談した（朝）。1月30日 土田豊大使はエジプトのカイスニ蔵相と会談した（朝）。1月31日 エジプト大蔵省は日本商品に輸入許可を出したと発表した（朝）。田中三男外務省情報文化局長は記者会見でエチオピア皇帝から技術者の協力と軽工業の進出について要請があったことを明らかにした（毎）。2月2日 政府はゴールド・コースト独立式典に小島徹三代議士（衆議院議員、自民党）を派遣することになった（朝）。エチオピアのウォルキーネ大尉は帰国した。農林省との協議で農業技術者のエチオピア移住要領が決まったと伝えられ

た（毎）。2月7日 参議院議運委は小島徹三（衆議院議員、自民党）をガナ国独立式典特派大使に任命することを承認した（毎）。2月9日 加瀬俊一日本国連代表は国連総会政治委員会でフランスとアルジェリアに妥協を要請した（朝・毎）。寸描「エチオピア政府日本顧問団団長にきまった池田純久」（朝）。2月19日 外務省はリベリアのイタリア大使から農業技術者を招きたいとの要請があったことを発表した（毎）。2月27日 小島徹三はゴールド・コーストに到着した（朝）。3月2日 カイロの官邸筋は、下田外務省経済局第六課長との交渉の結果、日本・エジプト貿易の拡大に同意したと語った（朝・毎）。3月6日 日本政府はガーナの独立を承認した（朝・毎）。3月13日 ナイロビ駐在の林田重美領事はウガンダのホッター通商局長と両国間の通商交渉を行った（朝）。3月14日 政府は3月20日のチュニジア独立一周年記念祭に特派大使として古垣鉄郎駐仏大使を派遣することを決定した（毎）。3月20日 日本・エジプト文化協定は調印された（毎）。5月1日 記事「エチオピアへ三女性 お孫さんの養育係に」（毎）。6月6日 中曽根康弘、下中弥三郎、中谷武世の三氏は土田豊大使と共にナセル大統領と会談した（毎）。6月29日 エチオピア政府顧問に招かれた池田純久と梅津美一が出発した（朝）。8月4日 西春彦駐英大使はアフリカの英領各地をめぐる予定でガーナに向かった（朝）。8月5日 日本とリビアは国交を樹立した（毎）。土田豊駐エジプト大使は駐リビア公使を兼任した（朝・毎）。8月12日 エチオピア初代駐日公使にゴイトム・ペトロが任命された（朝）。8月15日 西駐英大使はヨハネスブルグに到着した（朝・毎）。8月23日 日本政府はチュニジア共和国を承認した（毎）。9月12日 外務省はエチオピアからダム視察団が10月に来日すると発表した（朝）。チュニジアのハビブ・ブルギバ駐伊大使は藤山愛一郎外相と会見した（朝）。9月26日 伊藤武雄移動大使（大阪商船社長）はアジスアババに到着した（毎）。9月28日 日本エチオピア協会の発会式が開催された（朝・毎）。名誉会長はアトナフ・マコンネン駐日公使、会長は小金義照（龍法 '19）52-2, 108（506）

（衆議院議員、自民党）。10月10日 駐日エジプト大使ムスタファ・ユセフは着任した（毎）。10月11日 日本政府はエチオピアに親善使節団を派遣することになった（朝・毎）。団長は横山正幸（外務省顧問、元エジプト公使）。10月18日 エチオピア親善使節団は出発した（毎）。10月21日 井沢実代表は国連政治委員会で南アフリカの人種差別問題について「日本は南アフリカ政府の政策と思想に反対する」と発言した（毎）。10月23日 駐日エジプト大使のムスタファ・ユセフは信任状を提出した（毎）。10月30日 エチオピアのゴイトム・ペトロス駐日公使は岸首相に新任の挨拶をした（毎）。11月1日 ペトロス駐日公使は信任状を提出した（朝）。12月1日 記事「早大のアフリカ遠征隊 女性も二人、キリマンジャロへ」「赤道アフリカ遠征隊」（朝）。エチオピア親善使節団は帰国し、横山正幸団長は企業進出は有望と語った（毎）。12月4日 松平康東国連代表はアルジェリア問題で平和的解決策をつくれと演説した（毎）。12月12日 佐藤巧二特派員（カサブランカ）報告「北アフリカと日本茶」（毎）。12月19日 日本とエチオピアは友好条約に調印した（毎）。12月25日 新アスワン・ダム建設を調査するエジプト調査団の顔ぶれが決まった（朝）。12月26日 アジア・アフリカ諸国民会議に日本代表团（安井郁・北村徳太郎等）が出席した（朝）。

アフリカと世界

1月24日 解説「アフリカ諸国にみる独立と経済自立への努力」（朝）。1月30日 国連総会は南ア人種差別撤廃決議を採択した（毎）。2月2日 仏国民議会は仏領アフリカに制限的自治を認める法令を承認した（朝・毎）。2月13日 国連総会政治委員会はアルジェリア問題の平和的解決を求める日本など九カ国の決議案を可決した（毎）。2月16日 国連総会信託統治委員会は五信託統治領の独立を認めるというソ連提案を可決した（毎）。2月26日 国連総会は西南アフリカを国連信託統治の下に置くべきであるとの勧告案を可決した（朝）。3月7日 国連安保理はガーナの加盟を承認した

(毎)。3月8日 国連総会はガーナの加盟を承認した(毎)。4月6日 ニクソン米国副大統領のアフリカ報告が提出され共産主義対策が強調された(毎)。4月18日 ガーナのエンクルマ首相はアフリカ諸国会議を10月にガーナで開催すると提案した(朝)。4月24日 ソ連は国連信託統治委員会に対し三年以内の仏領トゴランドの完全独立を勧告した(朝)。6月11日 解説(中尾光昭)「米資本のアフリカ進出」(毎)。10月8日 国連信託統治理事会のコーマン議長は西南アフリカ問題について南ア連邦との交渉を再開する「斡旋委員会」の設置を提案した(朝)。10月11日 国連信託統治委員会は西南アフリカを国連信託統治下におく目的で南アフリカとの交渉を再開するために調停委員会を設置することを決定した(朝)。10月25日 国連総会は南アフリカ連邦との交渉を再開するために調停委員会を設置することを決定した(朝)。11月1日 国連総会政治委員会は国連の要請を拒否した南アの態度を遺憾とする決議を採択した(朝)。11月26日 国連総会は経済社会理事会に対しアフリカ経済委員会の創設を要請することを決定した(朝)。11月30日 ガーナの国連代表は国連総会信託統治委員会で英領・仏領カメルーンの統一と独立を要求した(朝)。12月5日 解説「世界の鼓動 (43) 苦悩する仏植民地政策」(朝)。12月6日 国連総会政治委員会はアジア・アフリカ諸国のアルジェリア決議案を否決した(朝・毎)。12月9日 解説(中尾光昭)「ねらわれる植民地の資源」(毎)。12月10日 国連総会はアルジェリア問題の決議案(妥協案)を可決した(朝・毎)。12月26日-1月1日 第2回アジア・アフリカ諸国民会議はカイロで開催された(朝・毎)。12月27日 ソ連のラシドフ代表はアジア・アフリカ諸国民会議においてヒモのつかない援助を提案した(毎)。12月28日 アジア・アフリカ諸国民会議は常設事務局をカイロに設置することを提案した(朝)。

北アフリカ

エジプト

1月15日 エジプト政府は外国銀行の国有化を発表した（朝・毎）。3月29日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「エジプトの経済危機（下）日本進出のチャンス」（毎）。4月8日 スエズ運河は再開された（朝）。5月29日 ナセル大統領は単一政党「国民連合」を結成するための法令を発表した（毎）。6月8日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「ナセル・エジプト大統領語る 日本の援助を望む」（毎）。7月23日 佐藤巧二特派員（カイロ）報告「革命五年のエジプト（1）」（毎）；（2）7月24日、（3）7月25日、（4）7月26日、（5）7月28日。8月30日 エジプト政府は共産主義者を逮捕した（毎）。10月27日 牟田口義郎特派員（アスワン）報告「新アスワンダム予定地を見る」（朝）。12月22日 牟田口義郎特派員（ポートサイド）報告「ポートサイド一年後」（朝）。

リビア

1月6日 リビアとチュニジアは友好同盟条約に調印した（朝）。2月3日 英国はリビア駐留軍を削減すると伝えられた（毎）。5月4日 ジェームズ・リチャーズ米国特使はトリポリを訪問しリビアへの経済援助を発表した（朝）。5月27日 サイド・イドリス国王はアブダル・マジェード・カバル前副首相を首相に任命した（朝）。6月26日 リビア政府は英・リビア友好条約の改訂を要求した（朝）。10月8日 フランス政府はアルジェリア・リビア国境問題で合同委員会の設置をリビア政府に提案した（朝）。

チュニジア

2月16日 フランス・チュニジア会談は仏軍駐留についての協定に到達しなかった（朝）。5月4日 リチャーズ米国特使はチュニスに到着した（毎）。5月22日 ブールギバ首相はアルジェリア問題解決に向けて地中海沿岸国会議を計画していると伝えられた（毎）。6月4日 チュニジア外務省は仏軍の撤退を要求した（朝）。6月27日 フランスとチュニジアは仏軍の撤退で合意した（朝）。7月25日 チュニジア制憲議会は王制を廃止し共和国を宣言した（朝・毎）。ブールギバ首相は大統領になった（毎）。内閣

は総辞職した（朝）。7月27日 解説（松原俊朗）「新生共和国チュニジア」（毎）。7月29日 内閣が発足した（朝）。7月31日 フランス政府は新チュニジア共和国を承認した（毎）。8月6日 退位した首長は財産を接收された（朝）。9月9日 アルジェリア国境に緊急事態を宣言した（毎）。9月12日 ブルギバ大統領は米国に兵器購入を申し入れた（朝・毎）。9月23日 チュニジア政府はエジプトから武器を受領することになった（朝・毎）。9月24日 アルジェリア駐在の仏軍部隊がチュニジアに進入した（朝）。チュニジアはイタリアから武器を購入した（朝）。10月3日 ブルギバ大統領はパリ駐在の大使を呼び戻すと述べた（朝・毎）。11月17日 解説「注目の的チュニジア」（朝）。11月20日 ブルギバ大統領はモロッコのラバトに到着した（朝・毎）。ブルギバ大統領とモロッコのユーセフ首長はアルジェリア問題で会談した（朝）。「北アフリカ統一」について協議した（毎）。11月21日 ブルギバ大統領はアルジェリアの国民解放戦線指導者と会見した（毎）。チュニジアとモロッコはアルジェリア紛争の調停者を申し出た（朝・毎）。11月27日 仏軍がチュニジアに侵入した（毎）。12月5日 仏軍は撤退を開始した（朝）。

モロッコ

1月20日 フォール仏国務相とベン・ユーセフ首長は会談した（朝）。2月11日 モロッコとスペインは協定に調印した（毎）。2月23日 ベッカイ首相はフランス政府に交渉を要求した（朝）。7月18日 モハメド五世は11月に訪米すると発表された（朝）。8月14日 モロッコは王国になりモロッコ首長の称号は国王（モハメッド五世）となった（朝・毎）。11月21日 佐藤巧二特派員（ラバト）報告「独立二年のモロッコ①」（毎）；続②11月22日、③11月24日。11月22日 スペイン領イフニでスペイン軍とモロッコ軍は衝突した（毎）。フランス政府はモロッコへの経済援助に同意した（朝）。11月25日 モハメッド五世は米国を訪問した（朝）。11月26日 モハメッド五世はダレス国務長官と会談した（朝）。11月28日 スペイン領

イフニでスペイン軍が反撃した（朝）。12月5日 民族主義者がスペイン領西サハラで反乱を起こしたと伝えられた（毎）。12月7日 スペインはイフニを防衛すると声明した（朝）。

[アルジェリア]

1月9日 モレ首相はアルジェリアを手離さないとの声明を発表した（毎）。1月11日 アルジェリア民族解放戦線は独立まで戦闘を継続するとチュニスで声明した（朝）。1月28日 民族解放戦線の呼びかけで八日間のゼネストが開始された（朝・毎）。回教徒がゼネストに突入した（毎）。2月2日 小島特派員（アルジェー）報告「アルジェーの町を見る」（朝）。2月6日 小島特派員（アルジェー）報告「アルジェリア情勢を現地に見る」（朝）。2月15日 民族解放戦線指導者はフランスとの交渉の用意があると声明した（毎）。2月24日 フランス当局は民族主義者400人を逮捕した（朝）。3月3日 小島特派員（アルジェー）報告「反乱アルジェリア現地に見る」（朝）。5月17日 仏軍はアルジェで回教徒30人を殺害した（朝）。6月12日 フランスのモーヌリ首相は施政方針演説でアルジェリア改革を表明した（毎）。6月16日 解説（渡辺善一郎）「頭痛い“アルジェリア”」（毎）。6月27日 解説「悪化するアルジェリアの争い」（朝）。6月30日 解放戦線の指導者がカイロに集まった（朝）。7月17日 アルジェリア解放戦線は世界各地に使節を派遣することを決めた（毎）。7月23日 小島特派員（パリ）報告「さし迫ったアルジェリア問題（上）」（朝）；続（下）7月24日。8月14日 仏軍事裁判所は民族運動指導者ベラミン・ルースに死刑を宣告した（朝）。9月13日 フランス内閣はアルジェリア行政組織再編法案を可決した（朝）。9月20日 民族解放戦線（FNL）は作戦を開始した（朝）。9月24日 フランス連合議会はアルジェリア基本法を承認した（朝）。10月20日 佐藤巧二特派員（アルジェー）報告「緊張のアルジェリアを見る」（毎）。10月24日 民族解放戦線は全土で軍事行動を開始したと発表した（朝）。10月30日 仏軍はテロ掃討作戦を実施した（朝）。

11月12日 佐藤巧二特派員（アルジェー）報告「動乱のアルジェリア（上）」（毎）；続（中）11月13日、（下）11月14日。11月18日 佐藤巧二特派員（アルジェー）報告「“砂の海”に石油の宝庫」（毎）。11月23日 民族解放戦線はモロッコ・チュニジアの調停を歓迎した（朝・毎）。11月27、29日 フランスはモロッコとチュニジアの調停案（アルジェリアの独立）を拒否した（朝・毎）。12月2日 仏軍と解放戦線が衝突した（朝）。

西アフリカ

[ゴールド・コースト]

2月21日 英連邦諸国はゴールド・コーストが独立後に連邦構成国になることを承認した（朝）。2月22日 エリザベス女王はゴールド・コーストに独立を与える勅令に署名した（朝）。3月3日 ニクソン米国副大統領はアクラに着いた（朝・毎）。3月5日 解説（中尾光昭）「黒人国「ガナ」あす独立」（毎）。3月6日 ガーナ共和国は独立した（朝・毎）。遠藤特派員（ロンドン）報告「ガーナ独立国きょう誕生」（朝）。3月7日 スクルマ首相はアフリカ独立諸国会議の開催を提唱し、ソ連を訪問すると述べた（朝）。6月23日 リストウエル前国務相がガーナ総督に任命された（朝）。7月3日 エンクルーマ首相はソ連訪問の招きを受諾した（朝・毎）。10月7日 解説（木村裕主）「“独裁”へ進むガーナ国」（毎）。

[ナイジェリア]

3月27日 英国植民地省スポークスマンはナイジェリア中央議会が1959年までに完全独立することを要求してきたと述べた（朝）。

東アフリカ

エチオピア

2月17日 尾崎特派員（バイルート）報告「新装する“花の国”」（朝）。2月20日 エチオピアのデレサ国連代表は国境問題でイタリアとの交渉を要求した（朝）。5月13日 マコンネン殿下（ハイレ・セラシエー世の第二皇子）は自動車事故で死亡した（毎）。9月11日 総選挙が開始された（朝）。

スーダン

3月22日 バクダッド訪問中のアブドラ・カリル首相はイラクのファイザル国王がスーダン訪問を受諾したと発表した（朝）。4月20日 リチャーズ米国特使がハルツームに到着しスーダン首脳と会談した（朝）。4月22日 アブドラ・ハリル首相はエチオピアを訪問しハイレ・セラシエ皇帝と会見した（朝）。6月27日 スーダン議会は解散された（朝）。8月15日 スーダン政府は米国の援助を受諾することを決定した（朝）。8月21日 ソ連はスーダンに通商協定締結の交渉を申し入れた（毎）。9月5日 スーダンは世界銀行と国際通貨基金に加盟した（朝・毎）。

〔ケニア〕

5月18日 英国政府はケニアに基地網を建設することを決定したと伝えられた（朝）。

〔ウガンダ〕

10月10日 レノックス・ボイド英国植民地相は来年ウガンダで直接選挙を実施すると語った（朝）。

〔セイシェル〕

4月6日 キプロス島民族運動指導者のマカリオス大主教はマダガスカル島に向かった（毎）。

〔仏領ソマリランド〕

7月9日 フランス国民議会は仏領ソマリランドに自治権を与える法案を可決した（毎）。

中部アフリカ

〔ベ領コンゴ〕

11月6日 コンゴ河のカビンビで船が転覆し37人が死亡した（朝）。

南部アフリカ

〔中央アフリカ連邦〕

1月12日 レノックス・ボイド英国植民地相は中央アフリカ連邦を視察

するためにロンドンを出発した（朝）。6月17日 英国は中央アフリカ連邦で放射性物質の探査を始めると発表した（朝）。

南アフリカ連邦

4月2日 南アフリカの南端にある英国のシ（サイ）モンズタウン海軍基地は南アフリカ連邦政府に引き渡された（朝）。9月5日 南ア連邦は共産主義に対する「アフリカ防衛同盟」計画を英国に提出したと伝えられた（朝）。9月12日 英国はアフリカ防衛同盟提案に対して回答した（朝）。9月15日 部族間衝突（ズウル族とバスト族）で死者40人を出した（朝）。9月17日 代表団を引き揚げていた南ア連邦は第十二回国連総会に復帰した（朝）。11月18日 被服工業の非白人労働者は政府の職業差別政策に抗議してストに入った（朝）。

1-2 報道と解説

1957年の最大の出来事はイギリス領ゴールド・コーストが3月6日に独立しガーナ共和国になったことである。同日、日本政府はガーナ共和国を承認した。「ガーナ共和国生る [アクラ（ガーナ）6日発ロイター＝共同] 西アフリカのゴールド・コーストは6日、英連邦内の独立国ガーナ共和国として誕生した」（毎、3月6日）。米国は独立式典にニクソン副大統領を派遣した。比して日本は小島徹三（衆議院議員、自民党）の派遣になってしまった。日本政府の判断に問題があった。ヌクルマ首相は日本の首相（または首相代理）の出席を希望していたのである。「小島代議士を派遣 西アフリカ英領ゴールド・コーストの独立式典に…ヌクルマ同国首相は日本から石橋首相または首相代理が参列してほしいとの要請を伝えてきていたが、…自民党衆議院議員小島徹三氏を祝賀使節として派遣することとなった」（朝、2月2日）。

ガーナ独立は多難な状況の中での独立達成であった。困難はすぐに表面化した。「独裁」へ進むガーナ国 …エンクルマ首相はこれを機に、野党

を非合法化し、一挙に独裁体制をつくり上げようとする動きをみせている。…ガーナ共和国は独立半年余で早くも重大な事態に直面しているわけだ。…反エンクルマ運動がガーナ各地で高まり、これの推進力とみられていた回教同盟党指導者二人が追放と決まったことがもれた8月22日には、反政府系民衆がアックラで大挙暴動を起こし、百人の逮捕者を出すという大事件にまで発展した（木村裕主）」（毎、10月7日）。

ガーナ独立はサハラ以南アフリカにおける植民地独立の先頭を切った。これを契機としてアフリカ植民地の独立運動は一層活発化した。英領ナイジェリアでは内政自治から完全自治へ民族主義者の運動は高揚した。ナイジェリア中央議会は英国に1959年までに独立を要請すると3月に要求した。「59年までに完全独立を ナイジェリア、英に要求 [ロンドン27日発＝AP] 英植民地省スポークスマンは英植民地、保護領ナイジェリアは1959年までに完全に独立することを要求するむね英国に通告してきたと次のように述べた。この要求はナイジェリア中央議会の議決の形で行われた」（朝、3月28日）。仏領アフリカ（西アフリカと赤道アフリカ）に対して、フランス国民議会は2月2日に条件付きながら自治を付与することを決定した。「西、赤道アフリカに条件付き自治認む 仏議会 [パリ2日発AP＝共同] 仏国民議会は2日、仏領西アフリカおよび赤道アフリカに対して制限付き自治を認める一連の法令を承認した」（毎、2月3日）。フランス領アフリカも自治から独立へ動き始めた。

国連信託統治領は自治から独立へという方向性が見えてきた。国連信託統治委員会は2月16日に信託統治領の独立への動きを承認した。「五信託統治領を独立 国連信託委 ソ連提案を可決 [ニューヨーク国連本部16日発UP特約] 国連総会信託統治委員会は16日英領タンガニカ、同カメルーン、仏領カメルーン、同トーゴランドおよびベルギー領ルアンダ・ウルンディの五信託統治領に速やかに自治政府と独立を認めよとのソ連提案を…採択した」（毎、2月17日）。

日本人新聞記者の現地報告では朝日新聞の記者二人、島津一夫（記事）と酒井武士（写真）がアフリカ各地を訪問し、その報告を「アフリカー周」と題して掲載したことが特筆に値する。訪問地はアンゴラ、コンゴ、仏領赤道アフリカ、北ナイジェリア、南ナイジェリア、ゴールド・コースト、仏領西アフリカ、モロッコ、タンジール、ウガンダ、ケニア、中央アフリカ連邦、エチオピア、スーダンであった。貴重な現地報告である。これだけ大量の写真と記事が一举に紹介されたことは快挙である。連載記事は一括編集され、朝日新聞社編『アフリカー周』（アサヒ写真ブック48号）が1957年7月に刊行された。

アフリカと日本の関係では日本エチオピア協会が1957年9月28日に設立されたことが注目される。「エチオピア協会発足 日本エチオピア協会の発会式が28日夜8時から東京丸ノ内の丸ノ内会館で行われた。アトナフ・マコンネン・エチオピア駐日公使、三笠宮、小金義照氏（自民党国会議員）ら25人が出席した。両国の親善強化を目的とする団体で、名誉会長はアトナフ・マコンネン公使、会長は小金義照氏」（朝、9月29日）。

アフリカ情勢全般の解説は「世界の鼓動（43） 苦悩する仏植民地政策」（朝、12月5日）と「海外経済 ねらわれる植民地の資源」（毎、12月9日）が出色である。

映画では「アフリカ縦断」「ザンザブク」「動物たちは何処へ行く」が公開された。いずれも動物映画であった。

2-1 論文と著書

論文

居城力「エジプトにつながる水産ルート」『水産界』865輯、1957年1月、59-78頁。「エジプト共和国憲法」（野村敬造訳）『ジュリスト』122号、1957年1月、24-32頁。「エジプト労働者との連帯のために全世界の労働者および労働組合にあてた世界労連のアピール」他『世界労働組合運動』

174号、1957年1月、1頁他。加藤一朗「古代エジプトの美術について」『華道』19巻1号、1957年1月、38-40頁。「人種差別反対のストに勝利したマダガスカル労組」『月刊自由労連』2巻1号、1957年1月、24-25頁。関矢省三「エチオピアの綿糸布事情」『輸出綿糸布月報』7巻1号、1957年1月、37-38頁。ナセル「エジプトの解放と建設のあゆみ」他『世界政治資料』13号、1957年1月、13-16頁他。西野照太郎「西アジア・北アフリカの嵐」『世界』133号、1957年1月、203-207頁。西村正己「南アフリカ柔道武者修行」『柔道』28巻1号、1957年1月、34-38頁。波多野裕造「北アフリカ民族主義の動向と将来」『海外事情』5巻1号、1957年1月、42-49頁。R. De Padirac「アフリカの天然ゴム」『ゴム』4巻1号、1957年1月、6-9頁。藤山愛一郎「グラビア アフリカの印象」；西野照太郎「歴史を切拓くA・A諸国」『世界週報』38巻1号、1957年1月、1-2、36-39頁。前嶋信次「ナイルの子等の思潮」『日本及日本人』8巻1号、1957年1月、36-41頁。武者小路公共「茶道から見たエチオピア」『淡交』11巻1号、1957年1月、102-103頁。「アフリカから帰った武政氏」『学校体育』2号、1957年2月、34-35頁。「アフリカ農業の実態」『世界政治経済資料』103号、1957年2月、3-65頁。「アルジェリア労働者への弾圧に世界労連抗議の手紙」他『世界労働組合運動』175号、1957年2月、14頁他。「生きているうちに」「アグネス」モニカ・フェルトン（阿部知二訳）『あたりまえの女たち——世界の母親の記録——』岩波書店、1957年2月、35-50、127-144頁。鈴木誠「礫器文化層からAustralopithecus遺骸発見」『人類学雑誌』65巻4号、1957年2月、40-41頁。南平正治「スエズ閉鎖と日本の貿易」『帝人タイムス』27巻2号、1957年2月、24-27頁。J・H・プライス「西アフリカの歴史」『月刊自由労連』2巻2号、1957年2月、27-32頁。「アフリカの新黒人共和国（ガーナ）」『アサヒグラフ』1957年3月24日、12-13頁。阿部（紹介）「アフリカ東部の土壌の有機物と窒素について」「ケニアの熱帯性黒色土壌におけるGilgai現象について」『日本土壌肥科学雑誌』27巻12号、1957年3月、37、41頁。

飯田善国「南アフリカの一日」『新文明』7巻3号、1957年3月、70-74頁。
 風波鬼門「西アフリカの柔道熱 マタジ道場破り記」『海貝』9巻3号、
 1957年3月、57-58頁。田中友次郎「第一次モロッコ事件と獨米關係」『社
 會科學論叢』7号、1957年3月、26-40頁。西野照太郎「多人種社会の經濟
 構造——ベルギー領コンゴの場合——」『アジア研究』3巻3号、1957年3
 月、86-92頁。武者小路公秀「アフリカにたつ火柱（アルジェリア）」『教
 育』7巻3号、1957年3月、6-10頁。村武精一「西アフリカ農耕民における
 土地慣習について——Nigeriaの若干種族の比較資料覚え書——」『愛知大
 學文學論叢』14輯、1957年3月、179-203頁。横山正幸「コーヒーの香に寄
 せて（一）（二）（三）（四）」『東京だより』92号、1957年3月、68-72頁；
 94号、1957年5月、57-62頁；95号、1957年6月、45-49頁；96号、1957年7
 月、64-65頁。「アルジェリアとの連帶週間」他『世界労働組合運動』177
 号、1957年4月、34頁他。「エジプト、スメル織物」「アレクサンドリア
 の絹織物」龍村謙『織染の美』毎日新聞社、1957年4月、8-11、50-53頁。
 神戸淳吉「アフリカの夜明け他」中島健一編『めざめゆくアフリカ』（『新
 しい世界地理』3）小峰書店、1957年4月、162-168頁他。「ケープタウンに
 て」『アサヒグラフ』1957年4月25日、14-15頁。小林正一「フランス植民
 地の特惠制度について」『税関調査月報』10巻4号、1957年4月、22-28頁。
 志鎌一之「『ガーナ共和国』の紹介」『運輸』7巻4号、1957年4月、9-11頁。
 高野俊介「北アフリカのコンクリートダム見学記（1）（2）」『セメント・
 コンクリート』122号、1957年4月、26-29頁；124号、1957年6月、21-28頁。
 譚若君「アフリカの新星ガーナ」他『世界政治資料』18号、1957年4月、
 30-32頁他。ベ・トレチャコフ「エジプトの外国貿易（上）（下）」『世界
 情勢旬報』319号、1957年4月、27-34頁；320号、1957年4月、24-32頁。西
 野照太郎「アラブ世界の二つの民族主義」；矢内原勝「アフリカの經濟開
 発問題」；坪上隆「アフリカの明暗」『外交季刊』2巻2号、1957年4月、54-
 61、62-72、89-91頁。西野照太郎「ナセル」竹内好他編『世界の七つの
 （龍法 '19）52-2、120（518）

顔 拓文館、1957年4月、6-61頁。西野照太郎「ナセルとスエズ」『アジア問題』6巻2号、1957年4月、79-87頁。西野照太郎「評伝ヌクルマー」『中央公論』72年5号、1957年4月、96-111頁。本協会調査部「国連第十一総会におけるアルジェリア問題」『国連評論』36巻3号、1957年4月、34-41頁。「民族運動の本山へ」～「ナセル大統領と語る」辻政信『世界の火薬庫をのぞく』東都書房、1957年4月、142-190頁。荒木吉治「黄金海岸の客車」『日本機械学会誌』60巻460号、1957年5月、98頁。クワメ・エンクルーマ「アフリカは目覚めた」；奥野保男「ガーナ独立への歩みとその将来」；三浦初男「鍵と錠前の国」；「グラヴィア 独立を喜ぶ人々」；J・ネルー「暗黒大陸に光を」『世界』137号、1957年5月、195-198、199-201、202、203-204、205-206頁。「欧州の旅 その一」東山魁夷『わが遍歴の山河』新潮社、1957年5月、27-42頁。小島徹三「ガーナ独立式典に参列して」『経済時代』22巻5号、1957年5月、81-83頁。小島徹三「光さすアフリカ大陸——新黒人共和国の誕生——」『政策月報』16巻51号、1957年5月、54-58頁。座談会（飯塚浩二、野原四郎、三上次男、西野照太郎、荒松雄）「知られざるAA世界」；M・A・パール「アルジェリアはかくて立ちあがった」『総合』1巻1号、1957年5月、64-71、53-61頁。エル・ジェザイリ「アルジェリア問題の平和的解決は全世界の要求である」他『世界労働組合運動』178号、1957年5月、29-32頁他。原子林二郎「暗黒大陸の光 ガーナの独立」『高校時代』4巻2号、1957年5月、128-133頁。藤岡謙二郎「アフリカ」藤岡謙二郎・西村陸男『地誌概説 日本・世界』大明堂、1957年5月、257-276頁。N・モルチャーノフ「ユーラフリカ」『世界政治経済資料』106号、1957年5月、63-75頁。「アフリカ諸国」『通商白書 日本貿易の現状 昭和32年』通商産業省、1957年6月、399-412頁。ジャック・ウオデイス「南アフリカに闘いの火ぶた切られる」『世界労働組合運動』179号、1957年6月、28-31頁。座談会（中山賀博、吉野文六、水野伊太郎）「アフリカ市場を語る」他『海外経済事情』7巻11号、1957年6月、1-11頁他。

「ナイジェリアの対日貿易」他『海外市場』7巻68号、1957年6月、2-5頁他。
 中岡泰二「エジプト」読売新聞婦人部編『世界の女性』ダヴィッド社、
 1957年6月、93-97頁。檜垣正忠「ガーナという国」『国連評論』36巻5号、
 1957年6月、24-29頁。チャールス・ヘイマン「ゴールドコースト運輸労働
 者の活動」『月刊自由労連』2巻6号、1957年6月、24-26頁。森伴太司「ア
 フリカの夜明け——世界の森林を訪ねて（三）——」『グリーン・エージ』
 7巻6号、1957年6月、52-56頁。池田林儀「アフリカ黒人の民話と伝承」
 『東京だより』96号、1957年7月、69-72頁。「ケープトウン」朝日新聞社編
 『昭和基地』朝日新聞社、1957年7月、70-75頁。「国際自由労連第一回アフ
 リカ地域会議」『ILO時報』9巻2号、1957年7月、139-146頁。M・ムサー
 「奴隷労働下のニヤサランド」『総合』1巻3号、1957年7月、112-117頁。矢
 内原勝「英領植民地の銀行問題」『バンキング』112号、1957年7月、45-59
 頁。「アジア・アフリカ研究会」『歴史評論』87号、1957年8月、95頁。「ア
 ルジェリアの“インドシナ化”」『世界』140号、1957年8月、14-19頁。F
 「独立運動に貢献 ハビブ・ブールギバ」『世界週報』38巻30号、1957年8
 月、39頁。J・H・オルデンプルック「期待されるアフリカの前進」他
 『月刊自由労連』2巻8号、1957年8月、6-7頁他。「ガーナの経済と交通」
 『外国交通調査資料』11巻8号、1957年8月、18頁。小林淳宏「アルジェリ
 ア人の地下組織」『世界週報』38巻29号、1957年8月、30-33頁。高橋統一
 「東および南アフリカ諸種族の政治組織と社会構造（一）（二）」『アジ
 ア・アフリカ評論』7号、1957年8月（奥付は11月）、23-30頁；8号、1958
 年（月表示なし、8月と推定する）、32-42頁。「血に染まる独立運動」『サ
 ンデー毎日』36巻31号、1957年8月、24-25頁。町野武「エジプトの民族主
 義」；牟田口義郎「アルジェリアの反乱他」朝日新聞社調査研究室編『中
 東諸國の現情勢』朝日新聞社、1957年8月、35-77、119-153頁他。「アフリ
 カにおける社会問題と賃金」『月刊自由労連』2巻9号、1957年9月、15-22
 頁。「北アフリカ三国の民族運動」甲斐静馬『中近東』岩波書店、1957年9
 （龍法 '19）52-2、122（520）

月、173-177頁。アンワル・サラマ「エジプト労働者の活躍」『世界労働組合運動』182号、1957年9月、14-15頁。杉田登志夫「アルジェリアの民族解放戦線」『中央公論』72年11号、1957年9月、160-167頁。TAK「新興ガーナに暗影」；WAT「よいお得意さん——日本とアフリカ」『世界週報』38巻36号、1957年9月、44-45、45頁。西野照太郎「問題はらむアフリカ」『世界週報』38巻34号、1957年9月、26-31頁。サイド・エル・マスリ「エジプトの力」『世界政治資料』28号、1957年9月、6-8頁。松原俊朗「反仏闘争下のアルジェリア」『海外事情』5巻9号、1957年9月、56-61、74頁。「わが国の在外公館一覧表」『わが外交の近況 昭和32年9月』外務省、1957年9月、219頁。「アフリカ」J.H.ジャクソン（町野武・渡辺敏訳）『戦後の世界』みすず書房、1957年10月、86-93頁。伊藤隆吉（書評）ガンサー「アフリカの内幕」『政治経済論叢』7巻2号、1957年10月、96-98頁。大脇岳夫「西アジア・アフリカ圖書館今昔點描（Ⅰ）（Ⅱ）」『ビブリア』9号、1957年10月、37-41頁；10号、1958年3月、65-70頁。L.T.C.クォ「エチオピア」『新地理』6巻1号、1957年10月、50-56頁。「ケニア モンバサ港」他『海外市場』7巻72号、1957年10月、13-14頁他。富村伝「埃及王朝文化の起源問題」『古代學』6巻3号、1957年10月、318-325頁。「南阿連邦史概説」～「英領西阿各地史概説」伊東敬『英連邦史概説（アジア・アフリカ篇）』表現社、1957年10月、164-240頁。西野照太郎「解放される大陸」『総合』1巻6号、1957年10月、204-205頁。西野照太郎「南ア連邦の社会経済構造」『地理』2巻10号、1957年10月、85-95頁。町野武（書評）ガンサー「アフリカの内幕」『社会思想研究』9巻10号、1957年10月、44頁。Y・ルビンスキー「帝国主義諸国のユーラフリカ計画」『世界政治経済資料』110号、1957年10月、3-28頁。ベン・ツロク「アフリカ人労働者と労働組合」『世界労働組合運動』184号、1957年11月、59-61頁。U「ナセルの片腕 アブデル・ハキム・アメル」『世界週報』38巻41号、1957年11月、31頁。レジナルド・レイノルズ「チュニジアの静かなる革命」『世界』143

号、1957年11月、116-120頁。「アフリカ州を中心とする州際航路」日本郵船株式会社調査部編『世界定期航路』七洋社、1957年12月、29-32頁。アルジェリア共産党中央委員会「明日のアルジェリア」『世界政治資料』35号、1957年12月、17-24頁。池田長三郎「エジプトのニールとピラミッド」『名古屋工業大學學報』9号、1957年12月、267-274頁。エー・エス・ヴァストーコフ「エジプトの国家機構」『研究資料』（社会主義政治経済研究所）1巻3号、1957年12月、43-54頁。JETROタンジール調査員「海外化繊市場現地報告 その6 モロッコ」『化繊月報』10巻12号、1957年12月、27-29頁。「緒につくかアフリカ進出」『商工経済』10巻12号、1957年12月、38-41頁。ウジャナ・ドリス「アルジェリア独立闘争における統一」他『世界労働組合運動』185号、1957年12月、23-26頁他。永島「海外市場調査（南ア連邦・ナイゼリア・ガーナ篇）」『調査時報』（日本化学繊維協會）105号、1957年12月、1-81頁。西野照太郎「南ア連邦の農業と鉱業（その1）（その2）（完）」『資源』60号、1957年12月、2-5頁；62号、1958年2月、10-15頁；63号、1958年3月、18-22頁。「東アフリカの商品市場」他『海外貿易事情』91号、1957年12月、5頁他。降幡調査員「エジプト」他『海外市場』7巻74号、1957年12月、19-21頁他。イ・ボテヒン「アフリカ植民地政策における新現象」『国際資料』4巻9号、1957年12月、13-20頁。URK「サハラ砂バクの奇跡」『世界週報』38巻46号、1957年12月、36-38頁。

著書

外務省欧米局中近東書記官室『スエズ問題』（欧七資料19号）外務省欧米局、1957年1月。外務省国際協力局国連管理室『英施政下のトーゴーランド信託統治協定廃止について』（協国資料67号）；『トーゴーランドの統合問題及び英施政下のトーゴーランドの将来に関する信託統治理事会特別報告書』（協国資料69号）外務省国際協力局、1957年1月。平凡社ペリかん写真文庫編集部編『アフリカ』（ペリかん写真文庫5）平凡社、1957年2月。外務省条約局『日本国とエジプトとの間の文化協定の説明書』（『条約集』

35集25巻）外務省条約局、1957年4月。日本工業倶楽部『エジプト事情』（経済調査資料8号）日本工業倶楽部、1957年4月。外務省国際協力局国連管理室『第4回第1部南西アフリカ委員会の事業について』（協国資料86号）外務省国際協力局、1957年5月。国際日本協会『西南アジア・アフリカ総覧』国際日本協会、1957年5月。ポール・ジョンソン（清水俊雄訳）『スエズ戦争 英国の悲劇』講談社、1957年5月。大阪府立貿易館（村上孝止）編『東南アフリカ旅商団報告書』大阪府立貿易館、1957年6月。朝日新聞社編『アフリカー周』（アサヒ写真ブック48）朝日新聞社、1957年7月。今尾登『スエズ運河の研究——外交史的・政治的・経済的地位——』有斐閣、1957年7月。外務省欧亜（米）局中近東書記官室『リベリア』（欧七資料21号）；『エチオピア 付エリトリア』（欧七資料22号）外務省欧亜（米）局、1957年7月。高橋一三『アフリカの旅』日本フエルト株式会社、1957年7月。外務省経済局第四課『東京銀行竹中審査部長の西アフリカ視察談』外務省経済局、1957年8月。日本外政学会編『アジア・アラブ・アフリカ』日本外政学会、1957年8月。ジョン・L・プロム（榎木恭介訳）『残酷なる草原 マウ・マウ団の本拠に行く』平凡社、1957年8月。外務省国際協力局国連管理室『仏トーゴランド視察団報告書概要』（協国資料93号）外務省国際協力局、1957年9月。外務省欧亜局第四課『リビア』（欧七資料26号）；『スーダン』（欧七資料27号）外務省欧亜局、1957年10月。外務省経済局第四課『1956年におけるウガンダ経済概観』外務省経済局、1957年10月。『エジプト共和国憲法』（『和訳各国憲法集 続10』）衆議院法制局、1957年11月。在レオポルドヴィル領事館『ベルギー領コンゴ事情』外務省（在レオポルドヴィル領事館）、1957年11月。三菱商事株式会社大阪支社棉花部『エジプトの棉花』三菱商事、1957年11月。『南アフリカ連邦憲法』（『和訳各国憲法集 続24』）衆議院法制局、1957年11月。日本経済新聞社編『アジア・アフリカ』日本経済新聞社、1957年12月。

2-2 文献と概説

日本政府はアフリカ外交の枠組みや政策を持っていなかった。外務省は外交青書（第1号）『わが外交の近況 昭和32年9月』を刊行した。同書はアジア関係、ラテン・アメリカ関係、中近東関係を項目としたが、アフリカ関係の項目を立てなかった。アフリカ問題は植民地宗主国の管轄事項とされたのである。「西アフリカに対する経済協力問題」は「英連邦関係」の中で言及された。しかも、その内容は「ガーナもナイジェリアも…わが国の輸入の対象となるようなものも余りない」（70頁）とネガティブなものであった。日本政府はアフリカ外交の重要性を認識していなかった。その典型がガーナ独立式典への日本政府代表特使の人選であった。米国がニクソン副大統領を派遣したのに、日本は小島徹三（衆議院議員、自民党）を派遣した。小島徹三は現地で日本政府の判断の間違いに気づいた。

在外公館は少なかった。「わが国の在外公館一覧表」（『わが外交の近況』）によれば、アフリカの在外公館はエジプト大使館、エチオピア公使館、スーダン公使館（兼）、リビア公使館（兼）、南アフリカ連邦（プレトリア）総領事館、モロッコ（カサブランカ）領事館（タンジール）名誉領事館であった。在日公館はエジプト大使館、エチオピア公使館、リベリア名誉領事館であった。WAT「よいお得意さん——日本とアフリカ」は次のように指摘した。「現在日本と外交関係を結んでいるのはエジプト、スーダン、エチオピア、リビア、チュニジアの五国だが、エジプトに土田豊大使、エチオピアに山津善衛代理公使（臨時）が駐在するだけで、それ以外の国はいずれも土田大使が公使を兼任している。ところで総領事館、領事館のほうは現在までに五館が開設されている。その内訳は南アフリカ連邦のプレトリアに総領事館が、モロッコのカサブランカ、ナイジェリアのダラス（ラゴス）、ケニアのナイロビ、ベルギー領コンゴのレオポルドビルにそれぞれ領事館がある」（45頁）。アフリカ諸国を視察した中山賀博（通商産業省通商局次長）は座談会「アフリカ市場を語る」において「ラ

ゴスに領事館。アクラには誰もいない。…レオポルドヴィルに領事館、南アフリカのプレトリアに総領事館、ナイロビが領事館、アジスアベバに公使館」（7頁）と発言していた。在レオポルドヴィル（日本）領事館は詳細な報告『ベルギー領コンゴ事情』（1957年11月）を刊行していた。ナイロビの林田重美領事は1957年3月には領事の仕事をしていた。「わが国の在外公館一覧表」の内容は不正確であった。

外務省と通商産業省は市場調査を実施した。藤山愛一郎（日商会頭）は外務省の「経済査察使」として1956年9月から11月まで中近東・アフリカ諸国を訪問した（藤山愛一郎『私の自叙伝』1957年8月、204頁）。藤山愛一郎が撮影したアフリカ諸国（ゴールドコースト、ケニア、南ア連邦、ベルギー領コンゴ、エチオピア）の写真が「グラビア アフリカの印象」として『世界週報』（1957年1月）に掲載された。中山賀博（通商産業省通商局次長）は（1957年）4月からアフリカ各地（カノ、ラゴス、アクラ、レオポルドヴィル、プレトリア、ナイロビ、アヂス・アベバ、スーダン、カイロ）の市場を調査した。中山賀博はレオポルドヴィルの丸山領事、ナイロビの林田領事と会った。中山賀博と吉野文六（外務省経済局第四課長）、水野伊太郎（経済外交研究会常務理事）の座談会「アフリカ市場を語る」の結論はアフリカにおける在外公館の充実であった。

特筆に値するのは大阪府立貿易館が「東南アフリカ旅商団」（1956年10月から1957年2月まで）を派遣したことである。団長は村上孝止（大阪府立貿易館）、団員は桂川進夫（西沢）、松元克巳（日商）、高原源一（東洋棉花）であった。現地調査はエジプト（カイロ）、スーダン（カルツーム）、エチオピア（アヂスアベバ）、ケニア（ナイロビ、モンバサ）、ウガンダ（カムパラ）、タンガニカ（ダレサラム）、南ア連邦（ヨハネスブルグ、ケープタウン、ダーバン）、白領コンゴ（レオポルドヴィル）、ガアーナ（ゴールド・コースト、アツクラ）、ナイジェリア（ラゴス、カノ）、リビヤ（トリポリ）で実施された。『東南アフリカ旅商団報告書』はスーダン、

エチオピア、ケニヤ、ウガンダ、南阿連邦、ゴールドコースト、ナイゼリアの市場調査の結果を詳細に記録している。日本商品の「見本展示会」をダレサラムとラゴスで開催した。帰国した調査団は通商産業省と外務省に報告した。

教育協力があった。武政喜代次（東京教育大学助教授）は1955-56年、一年3か月、リベリアから陸上競技のコーチとして招待され、1956年12月に帰国した。インタビュー「アフリカから帰った武政氏」においてリベリア社会について次のように答えていたのが印象的である。「独立に際してはアメリカから帰った人々と土着の人々の間に激しい闘争があり、結局、帰国した人々の勝利に帰して国が起こされたが、そのために支配階級と被支配階級が判然と区別され、生活様式も全く異なっている」（34頁）。宗主国が支配者であった普通のアフリカ諸国と違って、早く独立したりベリアではアメリカ帰りのアフリカ人「アメリコ・ライベリアン」が支配者であった。風波鬼門（川崎汽船和川丸乗組員）は（1956年）5月3日にマタジ（ベルギー領コンゴ）に到着し、「マタジ道場破り記」を遺した。

日本人はアフリカ諸国を訪問した。飯田善国（彫刻家）は1956年から1967年までヨーロッパに滞在したが、渡航途中の11月13日にダーバンに着いた。その滞在記が「南アフリカの一日」である。高野俊介（小野田セメントK.K.中央研究所副所長）は1955年5-6月に第五回国際大ダム会議に出席し、6月5日にアルジェリアのオランに到着した。その後、アルジェリア、モロッコ、カサブランカを訪問しダム現場を見学し、報告「北アフリカのコンクリートダム見学記」を提出した。内戦中の困難な視察であった。「原住民の間に澎湃として起こりつつある独立運動にフランス当局が悩んでいるとのうわさを聞いたこと…各地でテロがおこなわれ、われわれも夜間外出を禁ぜられた」（28頁）。

ケープタウンは南極観測船宗谷の寄港地として有名になった。往路は1956年12月19日にケープ入港、29日出港、帰路は1957年3月10日にケー

ブ入港、15日に出港であった。「ケープタウンにて」（『アサヒグラフ』）は宗谷歓迎風景の写真を掲載した。高橋一三『アフリカの旅』によれば、高橋一三（日本フェルト副社長）は1957年1月24日に南アフリカのヨハネスブルグに到着し、その後、ヨハネスブルグ、ポートエリザベス、イーストロンドン、ケープタウン、ダーバンを訪問した。

『世界』（1957年5月）は「特集 ガーナ共和国の生誕」を組んだ。クワメ・エンクルーマ「アフリカは目覚めた」は独立直前の立法（評）議会での演説からの抜粋である。「この国をアフリカ全大陸に輝く光にしよう」と訴えた。奥野保男（朝日新聞外報部員）「ガーナ独立への歩みとその将来」は一方で独立ガーナの困難を指摘しながら、他方でガーナ独立が全アフリカの解放を促進することを分析した。ネルー「暗黒大陸に光を」はガーナ独立を祝賀しながら、独立を認めた英国政府の態度を称賛した。

ガーナは独立直後から困難に直面した。「新興ガーナに暗雲」は野党指導者の国外追放や「酋長」行政の問題を取り上げた。西野照太郎「評伝ヌクルマー」はアメリカ留学からガーナ独立までのヌクルマーの経歴を詳細に紹介した。西野照太郎「解放される大陸」は「ヌクルマー首相は、かねて西アフリカ連邦の構想をもっている」（204頁）と指摘した。西アフリカ連邦構想はその後、アフリカ合衆国構想へと発展する。

『外交季刊』は「特集 ——転換期のアジア・アフリカ——」を組み、西野照太郎（国立国会図書館考査課）「アラブ世界の二つの民族主義」、矢内原勝（慶應義塾大学経済学部助教授）「アフリカの経済開発問題」、坪上隆「アフリカの明暗」を掲載した。

民族主義（ナショナリズム）について学会や論壇で議論された。ただし当時、その対象地域はアジアが中心であった。『岩波講座 現代思想 Ⅲ 民族の思想』（1957年4月）は先駆的業績であるが、アジア（アジア、インド、中国）の民族主義が分析対象とされ、アフリカの民族主義は取り上げられなかった。フランスなど植民地宗主国ではアフリカ・ナショナリズム

に対抗するために、ヨーロッパとアフリカは一体であるとする「ユーロ・アフリカ」（あるいはユーラフリカ）論が登場した。武者小路公秀「アフリカにたった火柱」によれば、ユーロ・アフリカ論はアフリカ再植民地化論であった。「アルジェリアの民族運動はこの新しい形の植民地主義に対して、民族の独立を確立し…ユーロ・アフリカ植民地主義を阻止する使命をになっているわけである」（9-10頁）。炯眼である。

研究者の論文としては次のものがある。小町谷操三（法政大学法学部教授）「スエズ運河の封鎖に基く若干の海商法上の問題」、高橋統一（東洋大学講師）「東および南アフリカ諸種族の政治組織と社会構造」、田中友次郎（長崎大学助教授）「第一次モロッコ事件と獨米関係」、村武精一（愛知大学総合郷土研究所研究員）「西アフリカ農耕民における土地習慣について」、矢内原勝（慶應義塾大学経済学部助教授）「英領植民地の銀行問題」。著書では今尾登（京都女子大学教授）『スエズ運河の研究』がある。

「アフリカ学会」は1957年4月に結成された。『アフリカ学会々報』（1号、1958年10月）によれば、「アフリカ学会」は1957年4月2日に発足した。「学会代表者」は下中彌三郎、岡正雄、西野照太郎、林達夫、馬淵東一、村武精一であった。西野照太郎「日本におけるアフリカ研究」（『歴史評論』92号、1958年1月）は次のように記述している。「この平凡社の「アフリカ」の編集について、社会人類学関係の岡正雄、馬淵東一両教授と、政治と経済の面から私が協力したが、それが機縁となって、平凡社の顧問林達夫氏の尽力により、アフリカの総合的な地域研究を目指して、「アフリカ学会」が生まれた」（51頁）。事務局は平凡社内に置かれた。これに参加したのは平凡社の出版物の『世界大百科事典 1（アーアン）』（1955年3月）や『世界文化地理大系 23 アフリカ』（1956年9月）で「アフリカ」を担当した研究者であったと推測される。「アフリカ学会」と「アジア・アフリカ研究会」の関係は不明である。「アジア・アフリカ研究会」は1955年から1958年まで『インド・イラン評論』（のち『アジア・アフリカ評論』）

を刊行した。事務局は東京大学東洋文化研究所内に置かれた。「アジア・アフリカ研究会会員名簿」（『インド・イラン評論』5号、55-56頁）によれば、西野照太郎は会員になっていない。西野照太郎は『アジア・アフリカ評論』に論文を寄稿したことがある。なおこの「アフリカ学会」は1964年4月に創立された「日本アフリカ学会」とは別個のものである（参照：川端正久「日本アフリカ学会の創立とアフリカ研究の揺籃」『アフリカ研究』86号、2015年1月、100頁）。「アフリカ学会」は十分な活動はできなかった。

翻訳ではジョン・L・プロム『残酷なる草原 マウ・マウ団の本拠を行く』の刊行が注目される。イギリス政府の掃討作戦が大々的に報道される状況で、マウマウ団側からの貴重な分析である。同時にマウマウ団側からの記録映画「マウマウ」が作成された。

概説書では国際日本協会『西南アジア・アフリカ総覧』が刊行された。概論は飯塚浩二（東京大学教授）「世界史の動向と西南アジア・アフリカ」、飯木信之（お茶の水女子大学教授）「アフリカの政治経済の地理的基礎」、西野照太郎（国会図書館法律政治第一課長）「アフリカの歴史」「アフリカの民族運動」、藤井正夫（国会図書館財政金融課長）「アフリカの開発計画の特質」、藤山愛一郎（日本商工会議所会頭）「中近東・アフリカと日本」である。アフリカ諸国の紹介は詳細である。『アフリカ』（ぺりかん写真文庫5）は写真付き概説書である。「アフリカの新黒人共和国（ガーナ）」（『アサヒグラフ』）はガーナの日常生活の写真（英国大使館提供）を掲載した。日本工業倶楽部『エジプト事情』は詳細に紹介した現代エジプト概論であった。